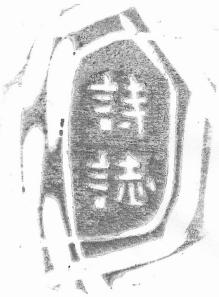
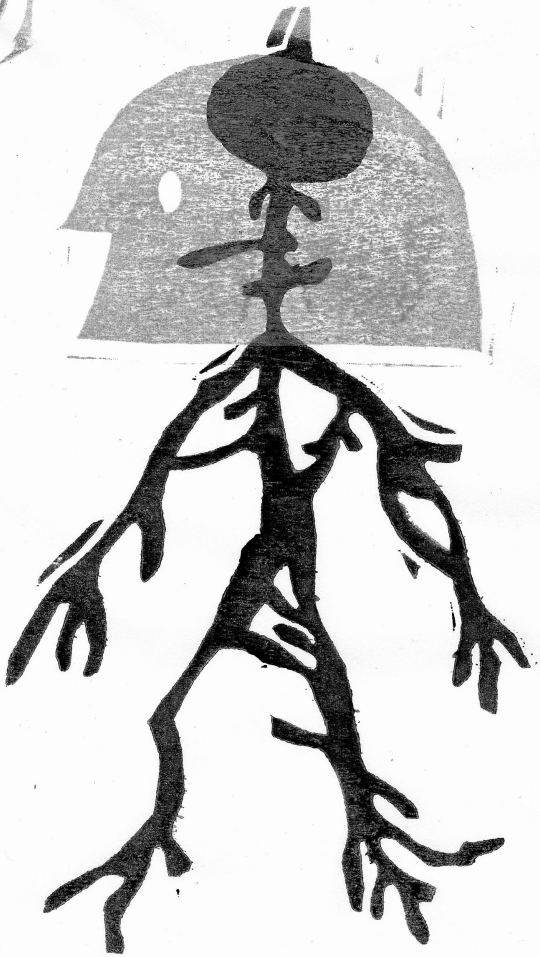


回生



さ・ち

目　次

【詩】崩壊するこ[illegible]ことは[illegible]い　中村正秋　4
【詩】猫かぶり　やまうちあつし　6
【詩】う　す　い　秋網まさお　8
【詩】ほんの思いつきで　金子忠政　10
【詩】戯・恋唄Ⅴ　金子忠政　12
【詩】戯・恋唄Ⅵ　金子忠政　13

情報短信（From Koguma）　15
【詩】鉄橋―1　前沢ひとみ　28
【詩】本当の名前　小熊昭広　34
【詩】気になる人　小熊昭広　38

ランダム・メモリー
表紙画　明才
URL：http://tsurumakidou.xxxxxxxx.jp

崩壊するには　まだ早いことは　判っているのだが
如何せん　思考に感覚が追いつかない

中村　正秋

剥ぎ取られた心の断片に
何の　未練があるというのだろうか
少しの痛みと悲しみを　そっと
手箱の中に収めて
誰が　そのかけらを　求めているのか

夜明け前に目をさまし
暗闇の中を　トイレをめざす
闇は　永遠の時間と距離を作り出し
たどり着くには　少しの勇気と本性と　まれに　感性が必要になってくる

意識から　世界が誕生するように
意識から　世界が消滅するように

終わりから　始めから　そんなことは判っているのだが
なかなか伝えることができなくて
苛立ちが　いつも　追いかけてくる

猫かぶり

やまうちあつし

人づきあいは苦手ゆえ
頭に猫をのせることにした
出会う人たちは皆
頭の上の猫に気を取られ
（毛並みをなで
　喉をなで
　さかんにじゃらし）
私のことは気にも留めない
そのすきに私は
契約書をまとめたり
曲がっているネクタイを直したり

あるいは勝手に
バストサイズを測ったりする
そんな暮らしが続いたある日
頭上の猫がへそをまげ
どこかに逃げていってしまった
とたんに私は元の木阿弥
出会う人らは私に対し
怪訝そうな視線を向ける
いたたまれずに私は駆け出す
逃げていった猫を探しに
だめだ、人間の前に
猫に好かれるすべがなくては

うすい

秋網まさお

とある交差点
かげろうの立ち
空(から)の打ち水が
投網のように
うたれている
追憶が行き交うbusy street
解けかかる知恵の輪の透き間から
べろがのぞく

腹ばう触角の穿つ龕
滞りがちな血路がはう
すぼめた舌先が

生臭い手足との
均衡をさぐる
絶え間なくきしる人影が
庇にくぐむ沈黙の
肩を揺さぶる

街角に現れた小枝を払われた巨木が
黒々と
影を脱ぎ降ろす
何かが頬をかすめる
無限の抱擁はとかれ
記憶と化す
背伸びの背後にずり落ちるボウレイ
たまらず両手を差し出す

ほんの思いつきで

金子忠政

ほんの思いつきで
涙を拭く練習をする
ひかるのが塵埃ばかりだ
顔にふわりとかかってきて
頭のうえで小刻みにふるえて飛び去っていく

プツンプツンと奥のてっぺんで音がする
切れている
やや下のほうはひりひりする
干涸らびてきている
先のまた先、そのまたずうっと先が
肯定のため
ふりほどけないままおびえているように、
感じる
減らされていく
言葉はゆがんで

儀式が受け身をとる
凌ぎやすいことだけをしてしまい
底光りする板に素足で立ち
飯を喰らう

のっぺり飯を喰らい
ようやくのこと暮れ
紫にくるまれ、ゆく
台所の暗がりに放置された、赤錆びた包丁のように
怒りはじめるため
悪魔と青く深い海のあいだ、
いたましい野放図のほうへ
続けさまに煙草をふかす

「何が起きてるの」
「わからん」
「火種まで消えてるわ」
「また明日やってみよう」

戯・恋唄V

金子忠政

視線を彷徨わせる時刻に静寂を奪いつくし
血と肉の荒々しさをつかもうとする
不意打ちの蜂起のような
眩暈だけを求めたい

濡れそぼった隠語を
聞くことは心地よい
見つめられ、私は君として規定される
蒼ざめた裸身の木々のように信条を捨てて
淫蕩に
牡蠣を啜り喰うように
もっと淫蕩に
死にたどり着くように
もっともっと淫蕩に

戯・恋唄VI

金子忠政

人科より見つめ返してくる
しっかりと見つめ返してくれる
ケータイが
難聴のウェーベルンのように
路上で凍えたようにふるえている
はらわたはいっこうに寒がらない
触れられてしまっては堕落するから
周囲を闇にして
くすぶる音によって
迷路だと思いこみ
決闘者のように道に立つ

弓の弦のようにそり返る
トルソは眼を洗ってくれるのか？

はいつくばる死者がかすかに見えはじめた
彼らにたどりつくための太陽を与え
まわり道を試みて単純になろうとする
私に静かに失われていく生活はありえない
まわり道が足りない

●寄稿者住所

やまうちあつし　宮城県名取市増田一丁目13-18-10
秋網まさお　宮城県仙台市青葉区葉山町3-5-201
金子忠政　宮城県白石市福岡長袋字永坂15の1
前沢ひとみ　宮城県黒川郡富谷町上桜木1-42-6
アルス上桜木 N2

情報短信（from Koguma）

▼2015.04.18　散り際の桜の木々の中、ハーフマラソンを走る。もう少しでゴールというとき、白石川の桜並木の堤防を走っていたら、強い風が吹いてきて、まるで雪の中を走っているような感覚に襲われる。まさに、桜吹雪という言葉どおりの世界。

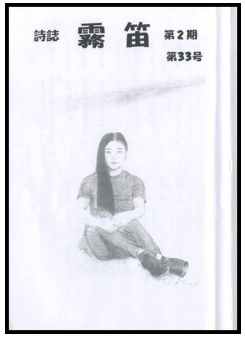
▼2015.04.19　父の入所している施設の観桜会。父は、せいいっぱい頑張っているが、食が細くなる。先が見えてきたような気がする。

▼2015.04.25　県立美術館で季節のタルトとコーヒー。詩誌『霧笛』第二期第三三号を読む、妄想が浮かぶ。それを持って、タナランへ、「青野文昭個展２０１５」。薄っぺらな作品に見えてしまう、困った。

▼2015.04.26　この日から玄関にツバメが頻繁にやって来る。果たして巣を作るのだろうか。夕、入水して脱水。赤ワインで食す。その後、ポッドキャスの録音。それ終わり、床に入る。菅原正二『聴く鏡Ⅱ』、ジャズ訛りのある臭い文章だが、面白いことに変わりはない。

▼同日　今年（二〇一五年）一月二四日に詩誌『霧笛』の編集人千田基嗣氏に大河原までお越しいただいて、約一時間半の話を聞いた。一応、テーマは、『気仙沼で詩を書き続けること、詩誌『霧笛』のこと』という設定ではあったが、話の内容等については、こちらからは特段、注文をつけるようなことはしなかった。私が大河原で続けている『無意味な意味の尾形亀之助読書会』は、何も尾形亀之助ばかりにこだわっているわけではない。

千田氏の話の半分は、東日本大震災が起きた日に千田氏のとった行動や、周りで起きていた出来事について、事細かに時間を追って、その記憶を辿ったものだった。正直、私にはそれは意外なことであった。もう一度確認すると、その話は気仙沼で「あの日」起きたことでなく、千田氏個人にあの日に起きた出来事ことを話した、ということだった。私は、千田氏特有の、物事に対して自分の位置をちょとずらして、客観的な距離を作り、傍観者のように、あるいは観察者のように語るその口調には好感を覚えた。言ってしまえば、ある一人の人間に起きた日常を淡々と語っただけの記録である。そこに、個人を超えた感情やら思想（想い）はなかった。千田氏の話が一通り終わって、私はテーマに沿って考えていた質問を千田氏に向けた。それは、「気仙沼で詩を書いて、そして詩誌を編集・発行していることで、気仙沼という土地が生み出す独特な詩の感覚というものは在るのだろうか。」というものだった。それに対して千田氏は、「特にない」と応えたように記憶する。敢えて言えば、「気仙沼という土地に住み（なんらかの関係を持って）、そこで書いている」ことで十分ではないかということを述べていたと思う。



その後、三月に入って詩誌『霧笛』第二期第三三号が送られてきた。私は、しばらく鞄に入れたまま読まずにいた。それは、ちょっと、詩誌『霧笛』と距離をとってみたかったという気持ちが、私の中のどこかにあったからだ。詩誌『霧笛』に対して、あまり先入観を持たないで読んでみたかったということに近い感情があったかもしれない。その先入観とは、まさしく震災のことと安易に作品を結びつけて読むことに嫌気がさしたということだと思っている。

そして、昨日、約二ヶ月の時間をおいて読んでみた。しかし、自分の頭の中には、震災のことと作品を結びつけたくなる気持ちが残っている。当然に、気仙沼に住んでおられる、あるいは関係している方々の作品には、東日本大震災のことが書かれているものが多いという印象を持つが、実際は表出される言葉としては、震災のことと直接に関わる作品は、かなり少なくなっている。そして、私は通読した後に、震災のことが直接に書かれている作品に、＜ためらい＞があることが気になった。例えば、

あの日　私は泣かなかった
あの日　私は叫ばなかった
ただただ驚きと悲しみで
現実を受け入れるしかなかった。

（中略）

それでも月日は流れて行き
私も忙しく毎日を過ごしている
その中で失った人を思い出すことが多い。
そして思い出しては涙が流れる。
今まで気づかなかった想いや言葉の意味。
何も出来ずにただ立ちつくすだけだった
あの日の私を
今、泣かせてあげようと思う。

菊池さかえ「あの日のこと」最初及び最後の一連

あの日以後　様々な分野からの
細かな質問に　くり返し応えてきた
人　ひとりがどのように
経済　身体　心理状況
家族　親戚　ご近所
どれだけ世の中と繋がっているのか

風に晒されて痛む　傷を庇うように
心が閉じる

照井由起子「課題　長期戦」最初の八行

私が感じた＜ためらい＞とは、二〇一一年三月一一日には個々人の中で様々な出来事が起こったのに、それを「あの日」という三文字でしか表現できない、いや表現しようとしないことであり、そのことにもうんざりしたとか、思い出したくないとかという気持ちが働いているのではないかということであった。しかし、よくよく考えてみると、作者にとって、あの日は、忘れられない日、戻れない日であっても、今生きている一日一日と同じ、ただの一日である。だから、詩が生きるための支えとなるということでは、二〇一一年三月一一日にいつまでもこだわっていても、生活は先には進まない。だから、「あの日」という三文字に置き換えて、菊池さかえ氏は、「あの日」の納得できていない自分の振るまいに対して、それでよかったのだと詩を書くことで整理しようとしている。照井由起子氏は、「あの日」のことが記憶の中で繰り返し思い出されることの辛さを耐え抜こうとする気持ちを詩で表現することで、自分を奮い立たせている。この、「あの日」と書くことだけで伝わってくるものは、先入観なのかも知れないけれど、「気仙沼という街に詩誌があることの豊かさ」を語っていた千田氏の話を思い起こさせてくれるし、この土地で詩をかくこと、そのことの意味が如実に表れたものだと思わずにはいられない。要は「あの日」を経た自分の始末を行っているのではないかと思う。「あの日」は、忘れようとしても、決して忘れることができないけれど、言葉に詠いあげることで、気持ちが楽になるのではないだろうか。そこには、詩のあり方としては、とても大切なものがあると思わせてくれた。

ほぼ、詩誌『霧笛』第二期三三号について、書きたいことは書き尽くしたような気がする。「気仙沼という街に詩誌があることの豊かさ」ということで書けば、西城健一氏の「裸木」は、とても美しい作品だった。そして、及川良子氏の「砂浜は　貝の褥」は、砂浜が失われること、そのことで生命の神秘さと、人と自然の関わりの豊かさが壊死することの危うさに警告を鳴らし、詩という武器で闘おうとしている彼女の意思を強く感じた。千田基嗣氏は、例の調子で「あの日」の詳細を明らかにしようとしている。

最後に、蛇足になるが、昨日、詩誌『霧笛』第二期第三三号を読み終え、上記のようなことを考えながら観てきた「企画展『青野文昭個展２０１５』（於：ターンアラウンド（仙台））」のことを書かせていただく。この展示で七点ほどの「なおす」という作品（オブジェ）が置かれていた。どれも、震災で波打ち際に流れ着いたがれきを拾ってきて、直したものだった。つまり、一旦壊れて、本来の用途を失い、廃棄物となったものを、修復し、再度価値のあるものとする作業を「なおす」という言葉でタイトルとして表現したものだと理解した。壊れた物を、修復するということは、青野氏の行為では、美術作品として価値を持たせるということになるのだろうなと考えて観ていた。いや、そうとしか思えなかった。私の中では、その行為は、ただただ人が観て美しいものに思える物に作り替えているだけの作業にしか思えなかった。

青野氏にとって、「あの日」はいったいどんなものなのだろうか。それは、私が知ることのできないことなのだが、最低限、青野氏にとってあの日は、過去のそれまで自分が行ってきた作品を作る延長上での、かっこうの素材が生まれた日、であったとしか思えなかった。まず、自分が物と向かい合う前に、自分とその物との関係をしっかりと考えた痕跡を、そこに見出すことはできなかった。具体的に言えば、企画展ではない方に展示されていた二〇一一年二月に作製されたオブジェとさしたる変化はないと感じたからである。変化は、ただ素材が変わっただけである。物事は、特に美術の世界では、美しければ良い、という簡単な世界ではないはずである。以前から青野文昭氏の作品には興味を持っていて、期待を抱いて観に行った割には、期待外れであった。というのも、詩誌『霧笛』第三三号を直前に読まなければ、感じなかったことである。

▼2015.05.01　一路、岡山へ、そこから鴨方。雌のコーギー犬メイの子を見初める。その後、倉敷。ホテルにチェックインし、入水して脱水。美観地区を見て回り、つけ麺食べて、森田酒造の清酒を飲む。午後八時からアベニューで MALTA のライブ、楽し。

▼2015.05.02　午前五時、美観地区中心にランニング。朝は比較的ひんやり、五キロほど走る。その後、大原美術館、本館、別館、工芸館を見て回る。急ぎ、児島へ。駅からタクシーで甘月堂に行き、大福を買い求める。次、ジーンズストリートへ、セール品を物色。senioでダメージが強いものを買い求める。午後、電車で岡山へ、それから広島入り。広島の友人と飲み会、楽し、料理抜群。

▼2015.05.03　広島県立美術館での磯江毅展、リアリズムという表現について、少し考えさせられる。物を忠実に写す。それは、個人の感性とか想いは抜きにして、ただ写す。その行為を徹底するとモノが独立してくる。その感覚、存在といか、そういった感覚に達すること。そして、やがてモノはいつか廃れ去る。死と直面することにほかならない。

疲れあり、広島市現代美術館の赤瀬川原平展は見る気が失せる。午後、京都へ。花洛庵野口住宅でヨシダキミコ＜私じゃない＞、化粧をすることで自分の入れ替えを行う。それと対面する羞恥心、町屋の景色にデジタル処理の写真が自然に溶け込む、不思議。無名舎で山谷祐介＜Tsugi no yoru e＞、黒い方形の物体にモノクロを貼り付ける。その重量が、町屋の中庭の空中楼閣に張り付く。誉田屋源兵衛黒蔵でマルク・リブー＜ノ・スンテク＞、アラスカシリーズ、近づくこと、視線が合わさること、受け入れられること、感情を交差すること、自然の中の一体感。嶋臺ギャラリーでフランシス・ウルフ＜A Vision of Jazz＞、文句なし。演奏者は見られる人ということを改めて感じる。だから、当たり前のように、緊張し、自分に集中することができる。京都市役所前広場でマルティン・ダシンデ＜フェゴ諸島先住民の魂－セルクナム族、ヤマナ族、カウェスカー族＞、折口の霊魂を強く感じる。森に隠り、儀礼を通過し、擬態して霊を授かるその一部始終、一番上に女性が位置するその形は、沖縄とほぼ同じ。

▼2015.05.04　歩いて、祇園辺りへ。SferaExhibition で ルイ・ジャズ＜チ

ェルノブイリ〉。モノクロ、人の表情が虚ろ、篠山紀信の震災のポートレートと、同じポートレート写真だが全く違う。次、祇園新橋伝統的建造物（バスザバトン京都祇園店（２０１５夏オープン予定））でフォスコ・マライーニ＜海女の島、ルガノ文化博物コレクション＞、写真で記録するという欲求というか、探究心というか、欲望というか、そんなものを感じる。次、ASHODELでオリバー・ジーバー＜イマジナリー・クラブ＞、特になし。人の顔を大勢見る。次、両足院（建仁寺内）で榮榮＆映里（ロンロン＆インリ）＜妻有物語＞。その前に、建仁寺を見る。枯山水の庭で嘆息。気持ちがやや豊かになる。天井画や屏風絵に見とれる。いいなぁ～。写真展は、寺の中の庭を歩けたことが収穫。写真撮影オッケーにつき、いっぱい撮るも、センサーにゴミがある。気になる。出町柳から京阪の機関車トーマス仕様の特急列車で恵文社一乗寺店へ向かう、途中、「近江や」というどんやさんで鍋焼きうどんを食す。サンマの蒲焼きの押し寿司二五〇円を夕食用に買う。恵文社は、面白いものが沢山在るも、やはりZINEが多いのがいい。しばし、喫茶で談話

▼2015.05.09　cafe haven ́t we met で詩誌の推敲、コーヒーにマフィン。情報短信の修正箇所多し。午後二時店を後にする。午後二時二〇分頃、桜井薬局の映画館に到着。上映まで待つ、ドアの隙間から、谷川俊太郎の映画がほんのちょっと見える。「詩は、まだ生まれていない」、という言葉が見える。午後三時一〇分上映開始。白河夜船、やはりボケが上手に使われている。３５ミリレンズでここまで寄れるのだろうか。フレーミングはさほど気にならない。ライカの絵にちゃんとなっている。綺麗。

▼2015.05.17　第二一回無意味な意味の尾形亀之助読書会。テーマは「詩におけるノンセンス及び音楽的要素をめぐって」。翻訳というもののある一面が、手に取るように理解できたような気がする。では、日本語の音楽性とは、いったい何であろうか。韻を踏むことだけだろうか。

▼2015.06.08　栗駒在住の佐々木洋一氏から、詩誌『この場所 ici』第一二号が届いた。いつもなら、さらりとした近況報告のような紙片が入っているものを、封筒の隅々、詩誌のページの間、どこを見ても入っていない、どうも気になる。その代わり、五つのコピーされた紙片の塊が入っていた。一つは、仙台演劇研究会情報誌『ACT』五月号の中のコラム【ミュージック・プロムナード】の「美しき天然（田中穂積作曲　武島羽衣作詞）」と題された連載のもののエッセイ、一つは、詩人会議一月号に掲載されているページ上に「原発報告」と記されている特集なのだろうか、その中のエッセイ「３．１１以後のむしゃくしゃすること」、一つは、日本詩人クラブ　詩界二六二号の＜地域からの視点＞という特集（若しくは連載もの？）の「田舎暮らしの日々の断片」と題されたエッセイ、もう一つは、詩誌『Po』春号の「わが思いの母、新川一江」というエッセイ、もう一つは、『詩と思想』五月号の＜壁を超えて＞の中の「防潮堤という壁を挟んで」というエッセイである。

これら五つの紙片が意味するものはなんだろうか、と考え続けていた。

肝心の詩誌『この場所 ici』第一二号の中の佐々木洋一氏の作品は、「雪道」と題された、最初の一行がとても美しい作品だった。だったと書いたのは、読み進むにつれて、ついに最後の一行に行き当たるからである。冒頭の一行と、リフレインで現れる中の一行、それに最後の一行を、誠に勝手なやり方であるが、引用させていただく。

雪道を初めて歩く人は　期待している

詩「雪道」最初の一行

しろく　しろく　しろく　どこまでもまっすぐに　しろく

詩「雪道」中間の一行

その純粋で無垢に恥じる存在

詩「雪道」最後の一行

この三行の行間に、佐々木氏の歩んできた（と思われる）人生が比喩として表現されている。そこに書かれているものは、まさに佐々木氏から頂く詩誌とともに入っている近況報告の紙片そのものである、ような気がした。そして、佐々木氏のつぶやきのようなものが、今号では詩作品になっていると思った。それが良いのか、悪いのか、私には当然のごとく判断できない。あの日、ササヤンカの詩に夢中になった若い頃の私には、何も言えないというところである。

それで、最初に書いた五つのコピーされた紙片に戻るが、そこに書かれている文章は、佐々木氏の生活なのだと思う。こういうことを考えて、こういう生活をしていますという近況報告のようである。

佐々木氏の詩は、それらの生活に裏打ちされた強いバネがあったと思う。バネは、見えないところで大きくはねるとびっくりする。だから、詩を読む者は驚くのだと思う。私は、そういった詩が好きだった。いや、これからもそういう佐々木洋一の詩が好きだと思っている。そして、今回の詩「雪道」であるが・・・。バネが途中から見えてしまっているような気がしてしょうがなかった。だから、どうも、「最初の一行が好きだった」と過去形になってしまう。そう語る私自身が、もう既に過去の人間なのかもしれない。

▼2015.06.09　一時間早退き、秘密が簡単にばれる。父の今後の治療を主治医に聞く、延命治療を望まない旨伝える。

▼2015.06.12　仙台空港でマルを引き取る。

▼2015.06.17　午前一時五七分起床、携帯が鳴る。施設より、父が息をしていないという知らせ。母には知らせずに、急ぎ、妻と施設へ。午後二時に娘を駅で迎えて、そのまま住職をお連れし、枕経。それからおかんし、身体を洗い（顔ふきの儀式あり）、化粧をしていただき、納棺の儀。穴の空いた硬貨は駄目、杖と菅笠を入れる。それに、背広、国鉄の帽子など。

▼2015.06.21　マルのシャンプー。

▼2015.06.22　光原社で和紙を買う。近くの嘉泉手打ち蕎麦 前田屋分店で昼を食す（とても美味しい。）。

▼2015.07.04　夢中になれるものがない日。マルがアクセント。

▼2015.07.19　午後二時頃帰還、寝室でジャズを聴く、ケニー・ドーハムはいいね（The Flamboyan, Queens, New York, 1963）。マッコイ・タイナーのピアノトリオ（Just Feelin）も。

▼2015.07.20　夕、料理。ビーフシチュー、牡蠣ムース、インゲンのサラダ、アイスクリームのビーチソール添え。赤ワインが白だったこと判明、がっかり。

▼2015.07.31　午前六時過ぎ起床。暑気払い、イヤフォン、破壊。好転日。

▼2015.08.22　東京へ。原美術館で「サイトゥオンブリー：紙の作品、五〇年の軌跡」展。絵も、言葉も自由だと思った。

▼2015.10.17　musee Maenakaで梅田祐子のフェルト展を見る。羊毛を少しばかりの濃度の石けん水（泡立つ手前、お湯、四〇度以上で五〇度位の温度がベスト）で揉み、絡み合ったら水分を取る。染料は化学染料で、揉む前に色をつけておく。

▼2015.10.24　第二三回無意味な意味の尾形亀之助読書会。武田こうじ氏による「亀之助を（声に出して）奏でます。」というライブ。いわゆる詩の朗読で音楽をどう使うかということ、無くても寂しい（言葉の抑揚だけでは、伝わらないものがある）。朗読ではなく、自分の言葉として普通に話すこと、文脈がわからないことは、大した問題ではない。では、何が問題なのだろうか。それは、理解しようとすることだろうか。それとは別に、武田氏が言う「言葉の間」とは、時間的なものではないらしい。でも、空間、例えば家の部屋を仕切る。というようなものか。

▼2015.10.31　えずこホールで演劇鑑賞。『タンゴ・冬の終わりに』。三上博史の言葉が、はっきりと認識できる。「演じる」、ということが明確にわかる。詩の朗読は演じるのではなく、自分の言葉になること。その違いは、自分の言葉と、他人の言葉。

▼2015.11.06　次第に右足が痛む、憂鬱。
▼2015.11.07　ランニングを控える。活版印刷に、俄然、興味湧く。
▼2015.11.14　軽井沢から長野へ行く。善光寺参り。途中、和紙の店に寄る。和綴じ本の良い表紙となるであろう紙を三枚買い求める。市があり、公園で銅版画の体験ワークショップを行っている。クリアファイルにニードルで絵を描き、それをプレス機で刷る。なんと、斬新で簡単な手法だろう。それを知ることができて嬉し。長野から、金沢へ。ひがし茶屋街の活版印刷業を営むユートピアノに行き、名刺交換をさせていただく、店主と雑話。インキの拭き取りは、軽油を使う。三年ぐらいでローラーを交換（樹脂製）、インキは真映社から取り寄せ。火星の庭の話をする。『そらあるき』という金沢の情報誌を買い求める。
▼2015.11.15　金沢マラソン。スタートラインを通過に約九分を要する。二五キロまで六分台で走る。三五キロまで七分台で走る。練習の成果があったと、嬉しくなったとたん失速。例によって右足のすねの部分に痛みを感じる。歩いたり、走ったりの繰り返し。
▼2015.11.16　遊行寺は、大きな敷地を持つが、観光客相手のものではないらしい。午前九時半に並ぶ、私を含め三人。檀家さん達が先に入場している。一遍上人聖絵は、実物を見られただけで感動。社務所で御朱印をいただき、早々に退散。
▼2015.11.22　句会。参加者八名（?）楽し、打ち上げあり。楽し。
▼2015.11.29　塩釜のエスプで紙芝居を鑑賞。演者は詩人の庄司文雄氏。同会場で開催中の司修の銅版画、素朴で良い感じ。拭きも線もとても素朴、そこがいい。それ終わり、庄司氏と蕎麦を喰らう。俺は、澤乃泉を飲んでしまう（伯母の見舞いのことをすっかりと忘れていた。）
▼2015.12.02　山茶花忌。今年は三人。住職としばし歓談。亀之助研究家の本を借りる。
▼2015.12.04　仙台市在住の佐藤洋子さんから詩誌『a's』vol.36が届きました。ちょっと、不思議なのは新田さんの名前がないこと。それだけならいいのですが、前号発行の時に、これからは新田さんが私に送ってくると言われていたのでなおさらです。送り主は依然として佐藤洋子さん。

それは、それでなにがしかの理由があるのでしょう。でも大したことではありません。ということで、「さてと」と声を出して一ページ目から読み始めました。冒頭の作品は、堀内靖夫さんの「起つねえさん」です。

ねえさん
ここに居るのか
無口のままで
泣かずにいるのか
跳べない接ぎ木になって

詩「起つねえさん」冒頭の第一連

ここまで読んで、「接ぎ木」が「跳ぶ」という状況がどうしても想像できませんでした。その後の詩行に、なにか言葉が繋がり想像が広がる手がかりがないか探しましたが、跳べない接ぎ木になった起つねえさんが、「心の芯を揺らしているよ」（作品の最後の行）ということ以外にどうも理解が及びませんでした。作者の思いはどこかにあるのでしょうが、その正体を感じることができませんでした。詩は、難しいということで片付けましょう。

次、橋場仁奈さんの「飛んで跳ねて」は、最初の行に「茅葺き小屋の戸をあけて」というフレーズから始まります。私の中では、茅葺きの家は大きいものと決まっています。最低でも一家族が住めるに十分な大きさの家を想像します。「小屋」とは、粗末な作業小屋を想像します。どうして「茅葺き」の「小屋」でなければならないのか。ちょっと、立ち止まって考えてしまいました。小屋の中で「にわとりが飛んで跳ねて」

いる状況はわかるのですが、どうして狭い小屋の中で命を持つものたちが、飛んで跳ねて、息もできないほど狂うのだろうか。むむ、どうでもよいことだと思うのですが、私にはそれ以上読み進めることができませんでした。ことは切実なのかもしれませんが、やはり、詩は難しいということで片付けましょうね。

最後に、佐藤洋子さんの「おかえり」です。前号での彼女の作品は、とても素敵だった。言葉に重力がなく、まさに音だった。それがこっちに伝わることでしっかりと重さを持った言葉になった。そう、軽さを持つ言葉は、身軽に心の中にスーッと飛んでくる。今号の「おかえり」は、彼女にとっては力作のような気がします。それだけに、なんかちょっと力が入り込んで、見ただけでとても重たそうな言葉が並んでいます。

カミさん、
ね、カミさーん
「バンザイ」ってそれ
海がいちどきに来て二本の足が奪われたとき
腕の幼な児を救助の掌に渡した
わたしが陸で挙げた最後のことばです
コエはわたしのものだったか、ひとりのわたしのコエというより
　それは
繋がるたくさんの陸のものたちの息づかいのようだったが
わたしたちがミジンコやミドリムシだったよりもずっと前のものたち
　が
初めて陸に辿り着いた歓びの記憶のコエのようなもので
陸を夢見るものたちの背後から来る、艶
艶艶祈りです

詩「おかえり」最初の十二行

この詩行から私が想像できる状況は、津波が襲いかかってきて、足を取られ、抱いていた幼児をやっとの思いで救助の人に託して、海に呑まれた「カミさん」が最後に「バンザイ」と言ったという理解になります。そこに不思議な点が二つあります。一つは、どうして死にゆく人が「バンザイ」と叫ぶのだろうかと言う点、そしてもう一つが救助の人が、「掌（てのひら）」というとても淡くて小さな存在だということです。そこで、私の理解に混乱が生じます。いや、理解などする必要がない、詩は感じるものです、と言われるのでしょうが、それにしても、その後に続く結構長い文章は、その説明にしかなっていないような気がします。気がするだけなのだから、そうでない可能性は高いです。そう思いながら、こんな文章を書いている。なぜ、このような作品になったのか、それは冒頭に書いたように力みすぎたのだろうなと思います。

それで、話はここで終わりません。その説明文が、とても良いのです。天の邪鬼といわれそうですが、引用した冒頭の詩行は、無くても良いと思いました。むしろ、邪魔です。冒頭の詩行があるおかげで、中のとても素敵な言葉が、ただの説明文に読めてしまいます。つまり、この作品は、第二連（ちょうど、ページの切れ目なので、第一連の最後の四行なのか、第二連なのか判然としないのですが）から始まっても良かったのではないか、いや断然その方が良い。それが、佐藤洋子の時空を漂う音であり、それがまさに詩なのだと思います。

そのようなものたちに包まれて　わたしは
皮膚の欠片をはらりはらり
人の形象の欠片をはらりはらり　そのように
わたしはわたしをゆっくりと脱いでいった

詩「おかえり」第二連

▼2015.12.05　川上さとみさんのライブ。ホテルに帰って寝ていたら、電話で呼び出し。打ち上げに参加させていただく久しぶりに朝一時過ぎに寝る。ソニー・ステットにまつわる話。ある方が、ソニー・ステットの初

来日のコンサートのチケットをやっと手に入れ、楽しみに待っていたけど、結局、麻薬密売でアメリカで逮捕された経歴が災いして、日本入国が許可されなかったので、このチケットが幻になったと話をしたら。ドラマーの田鹿さんが、若い頃（二十歳頃）、ソニー・ステットの初来日（一九七八年）時に調整（?）のためのセッションに参加した話をし出だした。セッションは、時差の関係で、ソニー・ステットの体調を考慮し、真夜中の午前二時開始。日本のミュージシャン（ピアノ山本剛等）は、みんな目を瞑ってじっくりと演奏している。すると、ステットは一人ひとりに歩み寄って、自分の目を指で大きく開くジェスチャーをして、「ちゃんと音を見て演奏しろ」と語ったとのこと。見えないものでも、見えるんだ。詩だって、見えないことを書いているけど、ちゃんと見えるんだ。ってなことです。

▼同日　以前、秋亜綺羅氏の『ひらめきと、ときめきと』をいただいたときに、「ああ、こんなやさしい童話のようなことが書けるって、いいなぁ」と思い、とても感動して妻に「読んでご覧ん。」と渡しました。確か、それは東京へ向かう新幹線の中だったと思います。いつも、彼女は、詩集を読んでも、「詩はわからない。」と言い、特段、感想は言わない。私が書く詩のようなものに対しても、まったく興味を示さない。でも、いつも本ばかり読んでいます。それは、人間の生きることの意味についての「答え」を探しているかのようです。事実、彼女の読む本のタイトルには、「よりよく生きるためには」とか「悩みの解消法」とか、「人生の楽しみ方」といったタイトルが付いいたりします。そして、その行為は果てしなく、間断なく列車のように続いています。

そこで、私は『ひらめきと、ときめきと』に生きることのヒントが、彼女がいつも読んでいる解説書の説明とかではなく、悟りのような言葉の啓示として書かれていると思い、彼女に渡したという次第でした。

彼女の読んだ感想は、意外なものでした。彼女は、こう言いました。

「暗い」と。

いつもの「わからない。」という言葉でないことが私には意外でした。

詩は、独りになって読むものです。言葉と一対一で対話するようなものです。妻が、「暗い」と言ったことは、彼女の心の中に詩の言葉が、どれほどか入ったことではなかろうかと思います。私の言葉は、まったく彼女に入らないのにです。

詩の言葉との対話は、孤独な自分を、さらに確認する辛い体験となったのではないかと思います。平たく言うと、「ひらめき」とか、「ときめき」とか、飛躍のある言葉は、その言葉の羽根が見える人と、見えない人がいて、それで決定的に飛べる人と飛べない人がいるということで、飛べない人は無力を感じてしまうのではなかろうか。さらに、詩を、希少価値として際立たせていることは、絶対的に後者（飛べない人）が多いということではないだろうか、と思います。平たくないですね。

これは、極、希な一例ですね。

で、季刊『ココア共和国』vol.18です。

冒頭、小林稔「記憶から滑り落ちた四つの断片」は、旅行記である。それも、忘れてしまった思い出を呼び覚まして、再構成したものである。であるから、全くの虚構である。如何にも、そのことが現実のことであるかのように書かれている。そして、それが事実として読めてしまうから、「なるほど」という感想で終わってしまう。ただ、第1章の「一、聖バヴォン聖堂」の中の「ガン」という言葉が気になった。最後の行の「胸の奥を針で刺されたような痛みに、思わず身震いした。」ということなのかもしれない。でも、「飛べない」な。

木下龍也「きのうの事件・事故・自己」は、短歌。短歌として読め、ということだろうが、そんなこと言わなくてもいいような気がする。前提を取り払えば、落書きとさして変わらない。だから面白いのかも知れないが、そう思うのは「飛べる人」だけだろう。

岡本啓「ポリフォニー」は、感覚が素晴らしい。私は「飛んだ」。

高橋英司「恋愛コスパ」は、袋小路である。とてもスピード感があって、破綻なく読めた。面白かった。ただし、最後に「お粗末」という出口を書いてしまっている。果たして、いいんだろうか。「オチ」があると落ち着かない。落下しそうだった。いや、してしまった。

草間小鳥子「レイニー」は、とても楽しい詩です。今にも雨が降りそうで、わくわくしてくる。時間の経過を感じることができた。それは、つまり読んでいる私が「生きている」ことを瞬間でも感じることができたということあるから、この詩に出会えたことに感謝したい。しかし最後の「すこしだけ未来の話をしよう」は、余計だ。危うく、落下しそうになった。

為平澪『機械　－悲しい重力－』は、本当にそうだと思った。絶えず、地球にいる限り、重たいものを感じて生きなければならない。だから疲れる。できることは機械のように淡々と生きることなのか知れない。一字一句からそのことがヒシヒシと伝わってきた。

最後に、秋亜綺羅「死は生のなかにしか存在しないのだから」は、「死んだこと」、「戻れない」、「夜があった時代」「さようなら」、「閉じ込められて」、「転げ落ちる」、「もう拾えない」、「とっくに死んでいるよ」、「欠落」、「無意味」、「不在」、「いないのに」、「逃げるべき場所」、「失調」、「不調」、「終わる」、「はじまらない」といった、いわゆる否定的な言葉で構成されている作品です。その言葉達から「飛ぼう」としている作品なのではないかと思います。飛べるのかどうかは、あなたには羽根が見えるか?それとも見えませんかと言われているようですね。

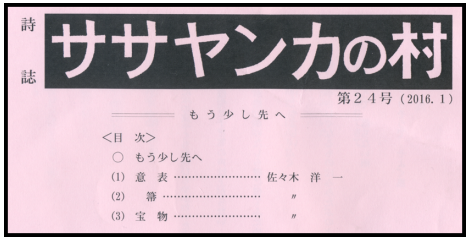
▼2015.12.12　狸森焙煎所へ。中川ワニさんのジャズの本を買い求める。

▼2015.12.15　早朝に仙台へ、そして東京にバスに揺られて向かう。午後〇時五二分頃、ほぼ予定通り到着。早速、活版屋さんへ、当方の理由を説明し、活字を購入する相談。大見出帳、小見出帳からなる活字一覧表をいただき、活字の数を記入してゆく。社長さんから色々とお話を聞かせていただく（インキの洗浄液や手フートの状況、大判の印刷の時の対応等）。それから、竹橋で製本道具を求める。針と糸とボンドとふ糊。角背本セット。つい、しゃべり過ぎる。最後に伊東屋に寄り、物色。

▼2015.12.21　佐々木洋一氏の詩の真骨頂は、誰でもが見えることを、これでもかというほど徹底的に自分の言葉で表現することではなかと、「ふと」思ってみました。それは、人の予想や常識を裏切る行為（あるいは過程）と言っても良いかも知れません。例えば、

垣根の傍らで鶏が鳴いている
鳴いている
そこにも朝はやってきた
身をのり出ししきりに鳴いている

「鶏」後半部分


詩誌
ササヤンカの村
第２４号（2016.1）
もう少し先へ
<目　次>
○　もう少し先へ
(1)　意　表 …… 佐々木　洋　一
(2)　箒 …… 〃
(3)　宝　物 …… 〃

この作品では、「鳴いている」ことを執拗に書いています。まず、「鶏が鳴いている」、次に「鳴いている」、そして「身をのり出ししきりに鳴いている」と。僅か四行で、三度も鳴いていることを描写をしています。不思議なのは、必ずしも同じ鶏が鳴いているという感覚にならないということです。さらに、果ては、鳴いているのは、鶏なのか、それとも全く違う別なものなのか、不確かになるということです。この妙な感覚が「詩」（つまり自分という存在が引っかかった）なのかなと思います。

このへんてこりんな感覚に陥るのは、私だけなのか、そうでないのか、それは解りませんが、この「鳴いている」という瞬間のリフレイン（繰り返し）は、一見、さらりと書いているようで、とても強固な言葉の厚みを持ってると思います。どうして、そのように読めるのかについては、「むなしいという闇の奥」というこの詩の冒頭の行に書かれ

ている言葉、「身をのり出ししきりに」という言葉など、いわゆる佐々木洋一節と表現するしかない言葉による新しい感覚（現代的という意味ではない。どちらかというと「根源的」かな。）の表現の仕方にあると、私は思っています。

では、作品「宝物」ではどうか。

林の中の朽ちかけた家

宝物はないか

「宝物」最初の二行

この作品は、「宝物はないか」という言葉に引きずられて、朽ちかけた家の中にある宝物が、あれこれと繰り返し出てきます。それは過去から今に至る時間の流れを凝縮したような、「朽ちかけた柱のキズ」や「腐りかけた床の重み」、「まだ表情をたたえる床柱」だったりします。そして、最後に、

南の方から光が入る窓

限りなく手を振ったあの日のカーテンの陰

少女の、

奥歯

「宝物」最後の四行

「少女の奥歯」という言葉から換気される印象は、とても俗物的に感じます。しかし、どうも神妙に私には感じるのです。はて？どうしてだろう。それは、「奥」という言葉と「朽ちかけた家」という言葉の重なりが、私にそういう印象を植え付けているのかもしれません。つまり、昔、少女だった美しい姿が、今は朽ちかけて「奥歯」しか残っていないという、それは老いぼれたおばあちゃんという想像に繋がります。

この落差をどう受け止めるのか。それは、陰影と言っても良いかもしれません。どこか暗いものが忍び寄る闇のようなものです。そして、私にはそれがどうしても不均衡に感じ取れるのです。光の部分と繋がらない、そんなことです。ここに、とても大切な「可能性」があるような気が、なんとなくしてきました。

他の二作品にも、「沈降」（詩「意表」）、「隠れている」（詩「箒」）という陰影のある言葉が入ります（深読みです）。現在の佐々木洋一氏の詩の力を感じ取るためには、この陰影を自分の心の印画紙に如何に繊細に浮き上がらせることができるのか、写し取ることができるのかということになるのかなと思った次第です。

▼2015.12.23　詩誌『霧笛』第二期第三六号が届きました。今号は、震災の特集号ということのようです。どうして震災から四年を経過した、「今」、東日本大震災に特化した作品を特集するのか。その必要性はどこにあるのか。そして、その差し迫った理由について納得させるものがあるのか。余計なことなのですが、その二つがとても気になりました。

この疑念と言っても良い私の困惑は、編集担当の千田基嗣氏が、「二一号以降はすべて被災地における震災以降の詩となっているわけで、あえて、特集と銘を打つ必要があるかとの思いもあった」と編集後記に書かれているとおり、震災後に発行されている詩誌『霧笛』は、すべて震災と切っても切り離せないいわば〈特集号〉みたいなものでしょうと私もずっと思っていたので、今回の「特集号」という言葉は、不意を突かれた思いでした。

そう、「今」、どうして震災の特集号とあえてしなければならないのか。

「しかし、時がたち、自らの経過として直接には震災と関わらない作品が増えてきてはいた。震災という未曽有の経験のあとではあり、一見そうとは見えなくても、どこか深いところでその体験は作用しているはずであるとしても、四年半を経過した現時点で、特集とする意義はあるのかもしれない。・・・（中略）・・・単に「震災特集と」というのは少し違う。記憶という言葉を付け加えて「震災の記憶特集」としてみた。もういちど、顧みて記憶として捉えかえしてみる、というように」（千田基嗣氏の編集後記）。繰り返しますが、単なる特集号ではなく、「記憶」という言葉を付け加えたとしても、前述の二つのことがどうしても気になりました。

気になった二つのうち、前者については、明快な答えが導き出されるような気がします。それは、同人の方々が，震災のことを書き，掲載して，詩誌『霧笛』第三六号を特集号とする必要性を、「今」、抱いたからだということだろうと思います。そこに、何の疑念もないのではないかと思いますし、そこに理由付けは必要が無いということです。

後者については、少々、思うところがあります。震災特集は、震災のことを振り返ってただ単に作品を書けばそれで良いのかということです。そうではないはずです。私は，気仙沼という震災の最も被害の大きかった被災地の一つである街に，多くの同人が生き延びて住んでいることだけで，もう十分に発する言葉、それ自体が震災特集号にふさわしいものだと考えていました。気仙沼に住んでいない同人がいても、気仙沼から出ている詩誌に作品が納められていること、その事実だけで十分（つまり，震災特集にふさわしい作品）ではないかと思うのです。そこを、あえて意識して特集とする意味合いがどこにあるのか、ということです。

震災から年月が過ぎるに従って（震災の）記憶の風化への懸念が叫ばれているようです。じゃあ、その問題提起に対して〈詩〉はどんな解決の可能性を提示することができるのか。ということを、「特集」という言葉が付いてしまうと、つい考えてしまいます。今回の号が，もしそのことを意識したものであるとしたら、それは少々、私が詩誌『霧笛』にこれまで感じてきた魅力とは違った方向のことだろうと思います。しかし、千田氏の編集後記に書かれているとおり、単に（純粋に）「記憶として捉えかえす」ということであれば、さほど読むことをためらう理由にはならないなと思いました。それは、誰でもが日常的に記憶を振り返り、今を捉える作業の中で生活しており、その中からまた新しい言葉が生まれてくると言って良いはずです。それは、なんら特別な行為ではないです。

以上が，今号の詩誌『霧笛』を読むに当たっての私の、ちょっと理屈っぽい問題意識です。

被災地は
まだ眠っていた

（中略）

おはよう！
行ってきます！
気をつけていけよ！
ごはんだよ！

たくさんの暮らしの声が
出番を待って
夏草の中に隠れているようだ

夏草が時を包み込み
人々の心を癒やし
やさしく背中を押している

詩「夏草」部分

西城健一氏の作品です。中略の三連には、被災地の現状が描かれています。例えば，冒頭の「被災地」という言葉を「気仙沼」という言葉に置き換えても、私にはなんの違和感もありません。さらに言えば、別な町の名をそこに置いても違和感はないと思います。そう、なんら特別なことでは

ないのです。

つまり、特集号とは、震災が詩誌『霧笛』にとっては、なんら特別なことではないということを特集したものではないかと私は思うのです。そういう意識で読むことが、書かれた言葉達に対して失礼のない接し方ではないかと、かなり捻くれた考えですが思うのです。

幾つかの作品に「あの日」、「あの時」という言葉が出てきます。

僕らの
記憶の深い森を辿っていけば
あの日のあの記憶へ立ち戻ることもできるだろう

でも
あの日この世から消え去っていった者たちは
僕らをいつまでも包んでいる

千田遊人「淡い未来の曙光」最初の二連

あの日
バスが開通した日
降りる人みんな
運転手さんに
「ありがとう」「ありがとう」

（中略）

そんな中でも
あの日の　感謝の気持ちを
忘れずに
バスを　降りるたび
思い出します

畠山幸「あの日の気持ち」最初と最後の二連

ここは本当に日本なのか？

潮臭く　ヘドロが乾燥してほこりっぽい
仕事も出来ず　学校に行く事も出来ず
人を探す事と必要最低限の物を買う
そんな毎日が続き　不安と不満の中
見えない未来を探していた

小野寺せつえ「あの時」最初の五行

ここでのあの日、あの時はまさしく東日本大震災の起きたときを示す言葉です。どんな小さなことでも、二〇一一年三月一一日に日常とは違う、突然やってきた抵抗できない暴力のような時間を過ごした人にとって、その言葉が指し示す情景や感情、行動は特別なものです。そして、一瞬で沢山の＜出来事＞を＜記憶＞を多くの人と共有できるものです。つまり、特別な言葉、大切な言葉なのだと思います。

巻頭に照井由起子さんの作品「あの日の近く」が掲載されています。この表題の「あの日」は、どうも前の方々が書いた＜あの日（時）＞ではないようです。

あれは十一年前の六月
細胞のひとつ　ひとつが清々しい風にのり

やわらかな陽ざしに拡散し　浮遊した
無心の時がどれほどだったか
いや　時の長さではない
心に　身体に一瞬でも　透明に浸された
感覚の記憶を確かめる

詩「あの日の近く」第二連

最初、この作品を読んだとき、どうして11年前なのだろうかと考えました。しかし、この詩にはそれを示唆する言葉はありません。その年月を指し示す言葉に意味があるとすれば、それは二〇一一年三月一一日よりも遙か前のことであるということなのかなと思います。つまり、人が生きている限り、何が起きようとも記憶はずっと繋がっているということなのだと思います。それは、とりもなおさず＜生きている＞ということそのものです。生きている瞬間を感じることのできること、それは自分を肯定できること、ではないでしょうか。力強く自分を肯定できることは、とても勇気が必要であり、そしてとても素晴らしいことだと思います。そして、最も大切なことはそれが絶対的に自分だけの瞬間であるということです。照井さんの「あの日」は、照井さんだけの＜あの日＞なのだと思います。

人間は独りです。独りだからこそ、他の人と出来事や気持ちや行動を共有できた時にそのすばらしさを感じることができるのだと思います。それは、誰にでも同じことです。なんら特別なことではないということです。だから、特別なのだと思います。

とても質素ですが、芸術の香りの溢れる素敵な空間です。定禅寺通りに面するビルの奥にひっそりとお店はありますので、静かな時間を過ごすのに最適な喫茶店です。

仙台市青葉区立町の喫茶ホルンです。フレンチプレスで抽出するスペシャルティ珈琲や南インドカレーなどをお出ししています。

営業時間　火曜～日曜11:00～21:00
（月曜定休）
※１時間開店時間が早まりました。

所在地　〒980-0822
宮城県仙台市青葉区立町26-17-202
（定禅寺通り・せんだいメディアテーク向かいの甘栗屋さんの2Fです）
電話 022-711-5520
Twitter：@kissahorn
URL：http://kissahorn.blogspot.com/

！！！ランチプレートを始めました！！！
お昼の午後12時～午後２時は南インドカレーのランチプレートもあります。ドリンクも１５０～２００円プラスでオーダーできるお得なサービスです。

鉄橋——1

前沢ひとみ

駅があり
一キロほど離れた場所に鉄橋があった
駅は
無人駅であり
待合室だけの小さな駅舎があった
時刻表にはない列車が通過してゆくと
ホームの熊笹が音を立てて風に傾いだ
鉄橋は一級河川に架かり
春のある日には
河川敷や中洲いちめん菜の花が遠くまで咲いて
眩しい光の帯になる
上流のダムからの放流の警報が鳴っても
たいして水嵩は増さなかったが
大雨が続くと川幅がにわかに拡がり
われわれが低木や石を積み上げて作った秘密の基地はもちろん

頑丈な鉄橋の橋桁さえ壊さんばかりの勢いで
濁流が走った
そんな駅と鉄橋が見渡せる場所にわたしの家はあった

鉄橋を渡る遊びを止めたのは何才の頃だろう
小学校の高学年の頃には
浅瀬を伝い
向こう岸の洞窟を探検した
死体もコウモリも見つけることはできなかった
その遊びに飽きると
少し上流にある砂利採石場へ行った
川底を掘る掘削機の稼動音が空に鳴り響き
われわれの目の前を
砂利を運ぶ山吹色のダンプカーが何台も何台も列をなし
地面を揺らし
砂埃を上げて行き交っていた
しん、と静まりかえった日曜日
そこはかつて文明が栄え現在は滅びてしまった場所のようだった
掘削機は
時空を越えてやってきたプテラノドンのように翼を拡げ

地面にくっきりと巨大な影を落としてわれわれを見下ろしていた
堆く盛られた砂利の山々を
われわれは剥き出しの手や脚を擦り傷だらけにしながら
ただ夢中で駆け登った
頂上に立つとあまりの空の近さに目眩がするほどだった
六年の夏休みのプールの帰り
砂利の山の濃い陰で
誰かが見せっこしようと言って始まってしまった
男の子たちは自分の性器を見せた
　イクって知ってるか？
ある男の子はこれはタッテいるのだと得意そうに言った
われわれ女の子はどうやって見せればいい？
男の子のように簡単ではないのだ
　ずるいぞ、おまえら
ずるい？
それでこの次は必ず見せる事を約束した
太陽は山際で膨らみ
線香花火が落ちる瞬間のように朱くユラユラしていた
約束は一人を除いて果たさなかった

ひどい目にあったなあ
　線路で遊んじゃあダメだ
祖父はそう言って
腰にぶら下げている薄汚れた手拭いで
わたしの顔の煤煙を雑ぱに拭った
手拭いは長く生きている人のひなびた匂いがした
まだ汽車が汽笛を鳴らし噴煙を上げて走っていた頃
何故手など振ったのだろう
知らない人たちに大きく手を振った
祖父が倒れる一週間ほど前から鼠が毎日罠にかかった
祖父はそれを家の近くの用水路に罠ごと沈めて溺死させた
鼠が毎日死んだからなのか
それがゴーサインだったみたいに
アポロ十一号が月面着陸した年の
トラトラトラの真珠湾攻撃と同じ日の朝
祖父は倒れ
それから四日間一度も目覚めることなく
一生分の脂汗を流し
物凄い鼾をかいて死んだ
祖父と諍いの絶えなかった人が

遺体にすがり号泣しているのを不思議な気持ちで見ていた

中学生になるとわたしは橋を渡った
鉄橋から一㌔ほど下流に
アスファルトが亀の甲羅のように罅割れたでこぼこの橋があり
河をまたぐその橋が唯一町の中心部へ通じていた
将来町を迂回するバイパスができ
もう少し下流に新しいりっぱな橋ができるという
それがいつなのかはさっぱり分からない
雨が降ると
轍はにわかに水溜りになり
勝手知ったドライバーはたいがい歩行者を気遣ってスピードを落とすが
それでも泥の飛沫は飛んできて
丹念に折り目を付けてきた制服のスカートや白いソックスを台無しにした
スカートのバサバサも疎ましく
泣き出したい気持ちを押し殺した
いつまでこんな朝は続くのだろう
早く大人になり自由になりたかった
放課後
わたしは一人のんびりと橋を渡った

コンクリの欄干にしがみつき河の流れを覗き込んだ
遠く、木々に見え隠れしながら鉄橋が見えた
河はすぐ下では緑色に水を湛え停滞しているかのようだった
向こうでは激しくうねり光の粒を蹴散らし逆っていた
河はいつもわたしを待ち受けているかのように豊饒だった

つづく

本当の名前

小熊昭広

親しい人同士では
本当の名前を呼ぶことは
あまりありません
だって、呼び捨てをしてはなんか変だから

「もよ」伯母さんは
「お」を付けて
おもよおばさんです
なんか、ハングルみたいです

「はつい」おばさんは
一番上のお姉さんだから
あんねおばさんです
今、考えるとアンネの日記みたいです

孝くんは、「たかちゃん」です
和宏くんは「かずくん」です
公平お兄ちゃんは「こうちゃん」です
善之君は「よしぼう」です

どれも
素敵な呼び名です
名前を正しく呼ばれることは
当たり前なことですが

たまに
学年に一人や二人は
容姿容貌で
呼ばれてしまうこともあります

そうトッポジージョ
耳がでかいから
そう呼ばれるのです
みんなが納得していれば特別変じゃないですけれど

病院に入院したら
「トッポジージョさんに面会に来ました。」
と、受付の方に言いますね
すると、「そんな患者さんはいません。」と言われます

外来患者の待合室で
どうしてよいか途方に暮れていると
みんなで遊んでいた頃のことが浮かんできます
ああ、楽しかったな、あの頃

それで
やっと、本当の名前がわかったりします
トッポジージョさんは
こぐまあきひろさんだったりするわけです

えらい違いだけれど
本当の名前も、なんかそれらしかったり
よく、テレビで性転換した人が
本名をばらしたりするのを見るけれど

それと同じで
そんなに、違和感はないものです
だって、名前はみんな後付けだから
犬みたいに

こう書くと
マル（わたしの愛犬です。）に失礼かな
いや、人間にも失礼かな
どちらにしても意識しちゃうと

ババッと
記憶が飛んでいくみたいです
そうなると自分にも
果たしてあるのかわからなくなります

気になる人

小熊昭広

飲み屋で
ある人を紹介された
その人は
私のことを知っているという
私は、その人のことを知らない
なんか、変な気持ちになった
何気なく、歩いている
そんな通勤の朝を
他人がじっと
ではないにしても
自分の行動を見ている
そして記憶している
その飲み屋で
遭わなければ、紹介されなければ

私など、その人の記憶に
留まらない
ただの通行人だったのに
紹介されて
会話してしまったことで
知人になってしまった
明日の朝から
どんな行動を取ったら良いのか
さっぱり想像がつかない
酔った場での出来事なので
忘れたふりをして
何もなかったように
いつもの自分でいようと思い
そのとおりに一日目を
なんとか終えた

ランダム・メモリー

■惰性で出しているわけではないのですが、どうも一本調子のような気もします。そして、ささやかな雑誌で良いと思うのですが、今号も三十ページを遙かに超えた量となってしまいました。嬉しいのか、どうしようもないのか、はたまた悲しいのか、わからないし、量の問題でもないとも思いますし、自分のせいです。

■詩誌『回生』は、いかにも詩の同人誌という体裁を保持していますが、同人誌という言葉には、違和感を常々感じております。会費制をとってはいないし、掲載料も取ってはいない、その代わり稿料も出してもいないのです。どちらかと言えば、ただの二人誌ということなのですが、商業誌でもないので、いわゆる同人誌の範疇に入るのだと思います。まあ、「同人誌」という言葉は死言のように思われているのだろうなと考えれば、どうでも良い話です。

■自分でもここで何を書こうとしているのかわからないのですが、ただこうやって文字を打って、決められたマス目を埋めているだけの文章が面白いとは到底思えません。かと言って、本当に何を書いて良いのかわからないのです。

■今号は、前号の「あ」号と比べ、寄稿いただいた方々の顔ぶれに大きな違いはありません。真野さんと前沢さんが入れ替わったということ位でしょうか。

■詩誌『回生』は、不定期ではあっても、連続に出ている詩誌です。しかし、作品を掲載される作者の方々にとっては、ひとつの号、ひとつの号が、単発です。単発というのは、書かれている方にとっては、一回にせいぜい三作くらいの掲載で、それでその方の作業が見渡せるということでなく、極、一部分が切り取られたものとして、ひとりぼっちで提示されているという意味です。でも、だからといって特別な作品を掲載する必要はありませんし、そんなことはできないことだと思います。気軽に誌面を独占して欲しいと思います。とは言いながら、自分の作品には写真を貼ったりして、余計なことをしています。

■小熊の情報短信が、やたら字が小さいくて読みずらいとか、だらだらと長いとか言われますが、言われるだけでありがたいと思っております。今号は、文体も日にちによって違ったりして、少々不快感を与えるかも知れません。ご勘弁願いたいと思います。文体を統一しようとすると、疲れます。

■今号に寄稿いただいた、やまうち氏、秋網氏、金子氏、前沢氏には、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

■最後に、表紙画は今号も明才様にお願いしました。快く引き受けていただき、感謝申し上げます。ありがとうございました。（熊）

詩誌「回生」第さ号（通巻第三十八号）

発行　二〇一六年一月一五日
編集　小熊昭広
表紙画　明才
発行者
中村正秋（なかむら・まさあき）
〒371-0103 群馬県前橋市富士見町小暮
2225-15　tel　0272-88-9073
gcom@garagecom.jp
小熊昭広（こぐま・あきひろ）
〒989-1201 宮城県柴田郡大河原町大
谷字原前 50-5　tel　090-5230
-2349
kaisei@poetic.jp
Twitter　@shishikaisei
発行所　快晴出版

定価　フリー（時価）